

A Convergence Framework for Developing Contents in Museum Exhibition

許, 偉隣

<https://doi.org/10.15017/1931923>

出版情報 : 九州大学, 2017, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :



氏 名	ホ ウィリン 許 偉隣		
論 文 名	A Convergence Framework for Developing Contents in Museum Exhibition (博物館における展示コンテンツの開発のための融合フレームワークに関する研究)		
論文調査委員	主 査	九州大学	教授 金 大雄
	副 査	九州大学	教授 伊原 久裕
	副 査	九州大学	准教授 知足 美加子

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、博物館の展示会企画段階において、鑑賞者主体の体験を中心とした相互作用を導く理論構築と具体的方法論を提示するものである。博物館の展示手法やコンテンツ開発環境が変化している中、博物館展示に関する学際的研究に対する実証研究が不十分であることから既存の方法論やモデルの分析により博物館のデジタル展示に特化した融合型フレームワーク MCF (Museum Content Framework) を提案、実証した研究である。研究は次のプロセスで行った。①博物館の展示デザインの変化様相を予測し、特性を抽出して、フレームワークに必要な要件を確認した。②人文、経営分野で議論されているデザイン融合方法論について分析し、その結果を基に博物館の展示コンテンツ開発に適用できる示唆点を導出した。③展示に特化した融合型フレームワークを提案し、それを博物館で実践し、有効性を確認した。以上の3段階プロセスの中で、提案したフレームワークの適用プロセスを提示し、その効果を検証するため、国立羅州博物館の展示コンテンツを開発した。博物館で企画展を開催し、入館者の評価を受け、その効果を検証した。結果、展示のテーマや企画意図が効率よく入館者に伝わり、さまざまな媒体を活用した展示が、歴史的なストーリーとともにつながり、入館者の関心や興味を引き出すことが確認できた。本研究は、現場で適用可能な方法論を示すために、実際に提案したフレームワークを活用して、コンテンツ開発を進め、博物館の展示や評価を通じて実証研究としての完成度を高めようとしたもので、その有効性が認められ、評価できた。

論文の構成は、序論、本論4章、結論から構成されている。

第1章では、博物館でのデジタル環境導入及び適用として、デジタル技術を基にした展示コンテンツの特徴を体験性、プレゼンス、アフォーダンスの3つの観点から分析を行っている。

第2章では、融合型フレームワークの研究として、鑑賞者の経験中心のデザインおよび分析的なアプローチの重要性について述べている。

第3章では、博物館の展示コンテンツ開発に向けたフレームワークの提案として、分析、戦略、設計を土台にした理論的根拠を述べている。

第4章では、提案のフレームワーク (MCF) を活用した開発事例として国立羅州博物館 「馬韓金銅飾履 (金銅製の履き物) ホログラム体験展」を取り上げている。

本研究の独創性とは、展示会企画段階において、鑑賞者や技術専門家等の視点から議論をする

ための論点整理とフィードバックを行うためのフレームワークの効果を実証した点にある。本研究は、独創的かつ社会的な意義も優れた研究であり、施設ミュージアムの企画段階において新たな提案を行ったものである。

著者の博士論文研究指導に当たっては、進捗状況を適宜把握し、議論を通してプレゼンテーション能力や討論能力を養うための適切な指導を行った。よって、学位審査を厳正に実施した上で本論文が博士（芸術工学）の学位に値するものであることを本審査委員会は認めた。